

小町の風姿

—『玉造小町子壮衰書』と世阿弥能楽論—

岩崎雅彦

世阿弥が能楽論で使用した重要な語の一つに「風姿」がある。役者の舞台上での姿を意味するこの語は、応永二十七年（一四二〇）の『至花道』を初め『花鏡』『二曲三休人形図』『三道』『拾玉得花』『五音曲条々』等の諸伝書に見える。世阿弥の最初の能楽論である『風姿花伝』は、応永七年に第三「問答条々」までが成立し、当初の書名は『花伝』であった。後に第四「神儀」と「奥義」が追加され、さらに第六「花修」と第七「別紙口伝」が加えられた。その後応永二十年代の後半に世阿弥自身が改訂を行い、その際に「奥義」までの五編の書名に「風姿」の語を付して『風姿花伝』とした（表章氏説）。書名変更という大きな改訂の事実から見ても、「風姿」は世阿弥能楽論における最重要語の一つであると言えるだろう。しかし、意外なことにこの「風姿」の語に関する論考はきわめて少ない。そうした中で松岡心平氏は、歌論の『愚秘抄』に「風姿」の語が歌風の意味で使われている例があることを指摘され（『風の世阿弥』「身体―皮膚の修辞学」平成12）、また天野文雄氏は世阿弥と同時代の禅僧惟自得叡の詩文集『東海瑠華集』

に二つ用例が見えることを報告されている（『風姿花伝』をめぐる二、三の覚書『観世』平成12・11）。天野氏の紹介された例では禅僧の姿について「風姿」の語が使用されている。世阿弥能楽論以外の「風姿」の用例は一見少ないようにも見えるが、重要な語であるにもかかわらず、この語にこれまであまり関心が払われて来なかったため、用例の収集がまだ十分ではないということも言えるだろう。

平安中・後期成立の『玉造小町子壮衰書』（作者不明。以下『壮衰書』と記す）は、若い時に美女であった玉造小町が零落した様子を描いた漢文体の書で、玉造小町は古くから小野小町のことであると考えられて来た。観阿弥作の能「卒都婆小町」や世阿弥作の能「関寺小町」が、この『壮衰書』の文章を取り入れていることはよく知られている。この『壮衰書』の後半は「一百廿四韻」と題する長編の五言詩であるが、その中に次のような句がある。

貧難繼露命、賤易絶風姿。

（貧しくしては露命継ぎ難く、  
賤しくしては風姿絶え易し。）

『玉造小町子壮衰書』は古くは群書類従、近年

では岩波文庫（平成6）にも収録されている著名な文献であり、必ずしもこれまでこのことが能楽研究者に知られていなかったわけではないと思うが、管見ではこれと世阿弥能楽論との関係を論じた論考はないようである。この用例は『日本国語大辞典』第二版（平成13）にも採用され、現在は万人周知のものとなっている。

引用部分是对句の形で、零落した玉造小町が貧しさのため命を継ぎがたく、また賤しさのため美しい容姿も絶えやすいことを述べており、「風姿」は美女の姿を意味する言葉として使われている。ここでは「風姿」と「露命」が対になっており、また「風」と「露」、「姿」と「命」もそれぞれ対の関係になっている。言うまでもなく、「露」ははかない「命」の比喩であるが、「風姿」の方は「風」が「姿」の比喩になっているというわけではない。この「露命」と「風姿」の二語を対の形にしたのは『壮衰書』作者の工夫のようだが、これは巧妙な文飾と言ってよいであろう。なお「露命」の語は世阿弥能楽論には見えないが、世阿弥作の老女物の能「檜垣」の「サシ」には「老衰おとろへ形もなく、露命窮まつて霜葉に似たり」の表現が見える。

柄尾武氏の労作『玉造小町子壮衰書の研究』（平成3）には、この部分の注に「風姿」の用例として『白氏文集』三十一「劉蘇州以華亭一鶴、遠寄、以詩謝之」、『本朝文粹』卷十の紀長谷雄「仲春積奠、聽講、礼記、同賦、桃始華」、黒川本「色葉字類抄」等が挙げられ

ている。『白氏文集』の用例は次の通りである。  
老鶴風姿異、衰翁詩思深。

ここでは「風姿」の語が鶴の姿に使われているが、仙界に住む鳥である鶴の高雅なたたずまいは「風姿」と呼ぶにふさわしい。そしてここで思い合われるのが、『至花道』の追記末尾の次の著名な句である。

白鳥花ヲ啣ム、是幽玄ノ風姿歟。

これは「白鳥花ヲ啣ム」という禅林の句を利用したものであるが、世阿弥は「白鳥」を「白鳥」に変え、それに「風姿」の語を使っている。鳥と「風姿」の語の取り合わせは、すでに白楽天に先蹤があったのである。この『白氏文集』の用例は、世阿弥との直接の関係はともかくとして、『至花道』の句を理解する際に参考になるのではなからうか。正倉院御物などに見られる『花喰鳥』の文様は、大陸から伝わり日本でも珍重されて来た。世阿弥の言う「白鳥花ヲ啣ム」は、この『花喰鳥』を念頭に置いたものなのだろう。この文様は和様化して『松喰鶴』となり、蒔絵などの模様に使われている。

『本朝文粹』巻十の紀長谷雄の文の用例は以下のようなものである。

況亦含、天々之風姿、混、遅々之日脚。

これは春のうらかな日の光の中に咲く桃の花の若々しい姿を表現している。これが『詩経』『桃夭』の「桃之夭夭、灼灼其華」を踏まえた表現であることは言うまでもなからう。「桃夭」では若い女を桃に例えているが、逆に長谷雄は桃の花に若い女の美しい姿を重ね合

わせ「風姿」の語を使っているわけである。世阿弥は『花伝』に「風姿」の語を取り合わせて「風姿花伝」と名づけたが、「花」と「風姿」とは、世阿弥以前から密接な関係にあったと言える。若い女を花に例える比喩が常套的なものである以上、女の美しい姿を意味する「風姿」が「花」と結びつくのもまた当然

と言えるだろう。『風姿花伝』第三「問答条々」には、「しほれたる」境地を説明するために、藤原清輔の歌とともに、小町の「色見え移ろふものは世の中の人の心の花にぞありける」の歌が引かれてもいる。世阿弥は「見姿遊風の初花」(二曲三人形図)、「花姿の見風」、「幽姿の花風」(ともに『遊楽習道風見』)などの語も使っている。

紀長谷雄には「風姿」の語を使った文がもう一つある。次の『本朝文粹』巻七「法皇賜、渤海裴迺書」がそれである。

徒想風姿、北望増恋。

ここでは「風姿」は渤海使の姿として使われている。「風姿」は女の場合は美しい姿、男の場合は立派な姿の意味で使われるのが基本である。黒川本『色葉字類抄』は「風姿」に「美人名」(「美人の意」の意)と注をつけている。世阿弥は『三道』で「貴人の女体、気高き風姿」、また「拾玉得花」で「みやびたる女姿に、花を散らし、色香をほどこす見風、是又なによりも面白き風姿なり」と記しているが、これらは「風姿」の一般的な使い方を踏まえていると言える。

『本朝文粹』で使われている「風姿」は、こ

の紀長谷雄の二例のみである。長谷雄は他にも「風月」「風霜」「風雲」「風景」「誘進之風」「涼風」「風花」「風人墨客」「和風」「凱楽之風」「風俗」「風亭」「風渚」など「風」を含む語を多用している。これは他の漢詩文作者と比較して長谷雄の顕著な特徴と言ってよいだろう。周知のように世阿弥も「風」の字を好み、この字を含んだ熟語を多く使った。長谷雄の使用した語と重なるものは少なく、両者に関係を想定する必要はないと思われるが、世阿弥以前にも「風」の字を好んで用いた文学者がいたことは記憶にとどめておくべきだろう。

『壮衰書』は「関寺小町」の作者世阿弥が確実に見、熟読していたに違いない資料である。世阿弥は小町をシテとする「卒都婆小町」や「通小町」の改作にも携わった。『三道』には「女体には、伊勢・小町」と、伊勢(「井筒」)のシテ、紀有常の娘と同一人物というのが当時の理解。岩崎『仏原』演出の歴史『観世』平成5、12参照)に続いて小町の名を挙げており、世阿弥にとって小町は能作の上で最も重要な人物の一人であった。美女小町の美しい姿という意味で使われている『壮衰書』の「風姿」は、他の用例に比べ、能の演者の舞台上での姿という意味の世阿弥能楽論での用法と最も重なるところが大きいと言えるだろう。世阿弥が能楽論で「風姿」の語を使用するようになったきっかけの一つが『壮衰書』の『小町の風姿』であった可能性はかなり高いと言っているのではないだろうか。

(法政大学能楽研究所所員)